

# 高松城水攻めに於ける

## 高政人質説の考察

林 寅 喜

(会員 佐伯市中の島町)

鶴藩略史等佐伯に残された史料によれば、藩祖高政(この時二十三歳)は天正十年(一五八三)五月備中高松城水攻めの時、毛利方に人質として赴き、その際輝元に器量を見込まれて森を毛利姓に改めたとしている。

このことについて私は、改姓の事情は差し置き人質問題には少なからず疑問を持っていた。

そこで今回はこれまでに調べた歴史書など参考にしながら、高政は果たして人質となり広島まで行ったのか否か、私的見解など交えながら書き綴って見ることにした。

鶴藩略史(増村隆也訳)には

「天正十年三月公豊国公に従ひ備中の高松城を攻む

毛利輝元これを援く 和成りて輝元乃ち梨父元綱(或

は秀包となす)を送りて質を為し 豊国公は公を送りて之に答ふ 公広島に在るや輝元その豪邁を愛し 一日從容として謂ひて曰く 毛利と森とは邦音近し 今我封内五万石予之を子に割かん 子能く我が為に封を支へよと 公答て曰く我采邑三千石を有す 願はくばその一半を分てば我能く家を支へんと 事遂に諧せず然して特に毛利氏を更へる事を受く」とある。

・梨父||虎のように猛々しい父親

・子||そなた・この場合高政を指す

・采邑||糧を得る村・知行地

・諧||和解

序でに元綱・秀包について書くと

・元綱||輝元の祖父元就の異母弟で、元就が家督を継いだ大永三年(一五二八)以後、年月は分からないが逆心の廉により誅せられている。したがって、この時人質として出される筈はない。

・秀包||元就の側室乃美大方の子(九男)として生まれたが、出生は必ずしも祝福されていなかったという。のち、三男小早川隆景の養子となる。よって略史にいう毛利方の人質とはこの秀包を指すのかも知れない。

余談になるが秀包はのちに隆景の裁量によって別家を立て、木下家定(北政所の兄)の三男秀秋が小早川の名跡を継ぐことになる。事の起こりは秀吉の策謀に押された毛利家が、家名存続のため選んだ窮余の策によるものであったという。

一方、温故知新録のうち、「毛利氏古系譜二付御尋並御答」には、この時毛利方から出された人質は穴戸某となっており、同じ藩の史料としてこうも違うと、高政の人質説も疑わざるを得なくなる。

高松城の水攻めに關しては、総大将であった羽柴秀吉の戦略と行動を軸にして解説しなければ理解し難い。そこで秀吉が中国に出兵した前後から、順を追って書いて見たい。

天正五年(一五七



七)十月、大和信貴山城の松永久秀が信長に背いた。秀吉は信忠に従って出陣していたが、十月十日夜久秀を略した後、信長から中国計略の総大将を命ぜられて同月二十三日、京を立てて播磨に兵を進め、緒戦は但馬から侵入して十一月月上旬岩州・竹田の両城を抜き、尼子を助けて毛利に奮われた上月城を囲み、兵を削いで竹中半兵衛・黒田孝高を福原城へ差し向け、十二月朔日落城させた。一方、上月城を奮い返した秀吉は尼子に守備させるが、毛利方の反撃が激しく戦いは二転三転する。

翌天正六年(一五七八)二月二十九日、播磨三木の城主別所長治が信長に反旗を翻した。これにより敵国内に孤立する形となった秀吉は、三木城攻略を優先することにして上月城急援をあきらめ、兵を返して城を囲み糧道を断って持久戦法を取り、二年九ヶ月後の天正八年十月十七日遂に落城させた。世に言う『三木の干殺し』である。

明けて天正九年六月二十五日、吉川経家守る鳥取城攻略に向かった秀吉は、今度は千代川の河口を塞いで武器弾薬と兵糧の補給路を抑え、四ヶ月後の十月二十五日経家は切腹して開城した。これを『鳥取の喝殺し』と言う。

息つく暇もなく同年十一月には、淡路に渡つて岩屋・由良の両城を落とし、鳥の大半を鎮圧した。

翌十年には姫路を拠点とし、三万の軍勢を率いて備中に駒を進め、高松城の攻略に着手した。この時毛利方では吉川元春・小早川隆景が同数の軍勢で対峙し、輝元本隊は二十<sup>キ</sup>程離れた猿掛山まで進出していた。

時節は折りしも梅雨のさ中、地勢の状況から正攻法で抜くことは容易でないと悟つた秀吉は、沼と湿地に囲まれた城の「地の利」を逆手に取つて、五月八日からその西方に高さ三間(五・六<sup>ト</sup>)、長さ二十六町(二・八<sup>ト</sup>)、水没面積百八十八<sup>ハ</sup>(数値には諸説あり)にも及ぶという堤を築かせ、足守川の流れを堰き止めて『水攻め』の作戦を取つた。完成は二十五日というから工期は僅か十七日、前代未聞の突貫工事であつた。

築堤にあつては近郷近在に触れを回わし、土俵一箇につき何がしかの米と銭を与えた。このため、農民は挙つて土を運び、見る間に土手は完成したといわれ、秀吉流の戦略はここでも見事に生かされた。

そのあと水位が上昇するに連れて和睦工作を始め、仲介役を買つて出たのが安国寺惠瓊(附記)であつたとい

う。

毛利方は和睦の条件として備中・備後・美作・因幡・伯耆の五ヶ国を織田方に譲り、代わりに城兵の助命を乞うたが、秀吉は「備中を除く四ヶ国は既に我が手によつて切り従えた。したがつて、城将清水宗治だけは許す分にはいけない。」と通告し、信長に後詰めと和睦の裁可を仰ぐための急使を立てていた。

(註) 惠瓊は毛利方から出された使者であつたとする説もある。とすれば築堤が進むに連れて、急遽和睦取り決めのため派遣されたものか、或いは信長の援軍説に毛利方が動揺したともいうが、何れにせよ仲介の労を取つたことには間違いないようである。

毛利方では宗治の切腹は忍びないとして、この件だけは應じようとしなかつたというが、惠瓊が宗治を説き伏せ、六月四日切腹することで決着した。ところが三日夜半に信長変死の報が届き、秀吉はこれをひた隠しにして四日宗治の切腹を見届け、誓紙を交換して引き揚げを開始した。

秀吉は五日早朝より陣払い（人物往来社刊「日本の合戦」では六日夕刻より）を始め、六日午前二時頃までに全員退去し、黒田官兵衛（長政）と堀尾茂助が堤を切つてシンガリを務めたとしている。

「日本の合戦」では、三日深更光秀が出した毛利方への密書を携えた飛脚を捕え、急遽和議を謀つて翌四日、宗治に腹を切らせ誓書を交換して堤を切つたとあるが、予備会談もなく短兵急に解決出来るものではなかつたろうと思う。

これにも諸説があつて、情報は必ず毛利方にも通ずるであろうから、機先を制して相手方の内懐に飛び込み、誠意を尽して説得したという、秀吉流の懐柔策であるが、ここは「挿雲太閤記」にいうように恵瓊が仲介して、和睦を進めていたと見るのが妥当であろう。

なお、宗治が切腹を申し出たのは六月二日であつたとしているから、堤が完成したとされる五月二十五日から（天正十年の五月は小の月で二十九日まで）僅か六日目であるが、その間水位は日増しに上昇していたと考へてよい。

（註）築堤は下部から順次嵩上げして完成するものであるから、一定の高さで締め切れば滞水はその時点から始まることになる。

さて、ここで高政の人質説について書いて見たいが、秀吉は和睦に当たり誓紙を交換したということで（挿雲太閤記）、その文面は左の通りである。

### 起請文之事

- 一、公儀に對せられて御身上の儀、我等請取申候条、いささかもつて疎略に存ずべからざること
- 一、申すに及ばずといえども、輝元、元春、隆景深重如才なく、我等身体にかけて、見放し申すまじきこと
- 一、かくの如く申談ずる上は、表裏これあるべからず右の条々もし偽りこれあるにおいては、忝くも日本国中大中小之神祇、殊に八幡大菩薩、愛宕、白山、摩利支天別して氏神の御罰、まかり蒙るべきものなり、よつて起請文くだんの如し

天正十年六月四日

毛利右馬頭殿

羽柴筑前守秀吉

## 〔挿雲太閤記〕より転記)

これを毛利方に届けたのは恵瓊であったとしているから、その時副使か従者を務めたのが高政ではなかったらうか。

逆に恵瓊が毛利方の誓紙を持参したとすれば、秀吉側の使者(正使か副使かは別)として高政が持参したかも知れない。

使者は条件の如何、また、成り行きによつては血祭りにされることもある。それは人質とて同じであるが、この場合人質ではなく使者である。ところが信長変死の報を知った毛利方(輝元本陣)に、高政は何日か留め置かれたのではあるまいか。したがつて、略史等という人質とはその時のことを指したのかも知れない。事実情報を掴んだ毛利方では、小早川隆景が追撃を強行しよう進言したというが、輝元は武士道に反するとして採扱さいかくしなかつたという。

一方、秀吉側としては人質を交換する理由(起請文参照)などなかつたと思う。もし交換したとすれば六万も

の大軍が対峙した戦の規模と両雄から見ても、高政など身分の低い家臣ではなく、もつと近い身内の者を選んだ筈である。でなければ毛利方も納得しなかつたらう。

秀吉は六日十時頃(日本の合戦)では七日(姫路に着いて二日間將兵を休息させ、自身も入浴中のところへ勸八政高(高政の間違いか?)の帰参を知つて引見し、陣払い後の状況を逐一聞いてゐる。(挿雲太閤記)

高政は誓紙を届けた後、毛利方の動きと農民の反応など調べた上で引き返したのではないか。もし高政が毛利方の要請によつて人質として送り込まれたのであれば、輝元の帰陣に従つて広島まで行つたか他の城に留め置かれたか、その辺の記録もありそうなものが見たことはない。

この後秀吉は六月十三日山崎の合戦で光秀を破つて天下制覇への道を歩み、天正十四年八月の九州征伐で輝元に出陣を命ずるまで、中国路で双方が対峙した戦などなかつた。

高政はこの時から僅か十ヶ月後の十一年四月、賤ヶ岳の合戦で傷を負つたが、同年九月から始まつた大坂築城

には、一方の監督として石材運搬の任に就いている。

【附記】

安国寺恵瓊・生年不詳・一六〇〇没

大内義隆に滅ぼされた安芸の守護武田光広の遺児と伝えられている。幼名を辰王丸と言ひ長じて京の南禅寺で修業、安芸に帰って安国寺の住職となる。武事を好み、毛利輝元と深い交わりを結び、天正元年將軍義昭の命で輝元が義昭と信長の和睦を斡旋あつせんしたとき、上京して信長・秀吉と接した。この時二人の運命を予言したという。

『信長の代五年三年はもたるべく候、左候てのち高転びに仰のけに転ばれ候うずると見え申し候、藤吉郎ざりてはの者にて候』

同十年秀吉の備中高松城水攻めの時仲介役を勤め、秀吉が天下を取った時伊豫で六万石を与えられて大名となったが、関ヶ原では西軍に組し、五年十月一日三条河原で斬首された。

別冊歴史読本(新人物往来社)より転記

【参考図書】

日本の合戦 人物往来社 挿雲太閤記 河出書房  
歴史群像 学習研究社 日本史年表 右同新社

『訂正とお詫び』

一八三号P33の水ノ子灯台資料中、「水ノ子島の領地争奮戦」の中に『毛利藩』という表示が再三あります。

これは投稿者が原稿と一緒に提出してくれた資料でしたので、編集の際つい見落として原文の儘掲載しましたが『佐伯藩』の間違いでした。訂正してお詫びします。

なお、終わりから十行目『纏まとま』ったのルビと送り仮名が欠字していました。